

小学校教育実習における現状と展望 (Ⅲ) —学生の教職観に関する調査から—

福田 啓子

(平成21年9月30日受理)

Teaching Practice of Elementary School, Today and Future (Ⅲ) —Based on a Survey of Students View on School Society—

FUKUDA, Keiko

(Received on September 30, 2009)

キーワード：小学校教育実習，教員養成，社会化
Key words：Teaching Practice, Teacher training socialization

はじめに

これまでに、小学校教育実習指導の充実した内容のあり方について学生のアンケート調査結果から検討してきた。そこでは、教育実習体験を通しての感想や思いを分析し、教育実習がその後の学生の生活や進路決定に何らかの影響を与えていることを明らかにし、教員養成大学における実習指導の方法について検討した¹⁾。また、実習終了後の報告書から、教員の仕事の中核である“授業”に焦点をあて、内容や感想を分析した結果から、大学での各教科指導や専門科目との関連性を重視した実習指導のあり方を示唆した²⁾。

今回は、これらの結果を踏まえて、大学生が小学校の組織、人間関係、教員としての役割等をどのように受け止めているか調査によって明らかにし、教育実習指導における教員としての学校社会への適応（社会化）を促す直積的要因となり得る教育指導方法のあり方について一つの示唆を得ることを目的とするものである。

今日、社会の大きな変動に対応し、教員の資質や学校を取り巻く環境、児童の言動など学校社会が抱える課題も複雑かつ多様化している。教員が児童にとって良い環境を整え、適切な指導をしていくためには教員自身が学校という社会集団に上手く適応していくことが必要なことである。近年、教員養成の制度的枠組みやその内容等に関して大きな改革が迫られ、今後急速な展開が予想される。また大学も小学校も多様な学生や教員を抱えている。このような状況下において、学校社会や教員社会・文化にも変化が生じることは必須であり、教員の職業的社会的な社会化、教員養成における職業の予期的社会的な社会化についても改めて問われるべき時

期であるといえる。従って、学生の教職観の意識を中心とした調査からその内容を分析し、教員養成における教育実習指導の意義とあり方についての一端を検証する。

1 調査方法

1) 調査対象

本学児童学科児童教育専攻小学校教員免許状取得希望履修者

2年生 (91名), 大学3年生 (76名), 大学4年生 (81名)

回収率 97.0%

2) 調査方法

大学における「教育実習指導(小)」(3年次, 4年次), 及び「介護等体験の研究」(2年次)の授業終了後に調査用紙を配布し、一週間後に回収した。

3) 実施期間

平成20年7月～8月

調査内容

問1 小学校教員への志望度と志望理由について

問2 小学校教員の生活や人間関係度について

問3 教職への不安とその内容について

問4 教職への適応度について

問5 大学時代に習得すべき教員の資質について

問6 小学校教員としてのあるべき内容について

4) 分析方法

各質問の回答選択肢は、基本的に5件法で「非常に(大変)～である」「やや～である」「どちらともいえない」「やや～でない」「全く～でない」とする。項目ごとの回答結果から、全体の割合及び平均値を算出する。選択肢の多い項目については、同様に全体の割合を算出する。自由記述

とした項目は、カテゴリー別に分類し、必要に応じて記載する。

2 結果

(1) 教職への志望度と志望要因

図1は、志望度の高い順に5点、4点、3点、2点、1点としてその平均値を表したものである。学年別にみると、志望度の平均値は、2年生3.56、3年生3.76、4年生4.00と学年ごとに上昇している。図2は、図1の結果の具体的な割合を各学年別に示したものである。2年生では、小学校教師に、a「とてもなりたい」、b「ややなりたい」の回答は、それぞれ24.2%、29.7%、3年生では40.3%、14.9%、4年生では53.60%、17.90%を示している。また、2、3年生では、c（まだわからない）が20.9%、26.9%、d（あまりなりたくない）が、19.8%、16.4%みられるが、4年生では減少している。しかし、e（全くなりたくない）がわずかながらも増加している。これらは、教職への期待と同時に難しさや大変さを感じた結果とも伺われる。

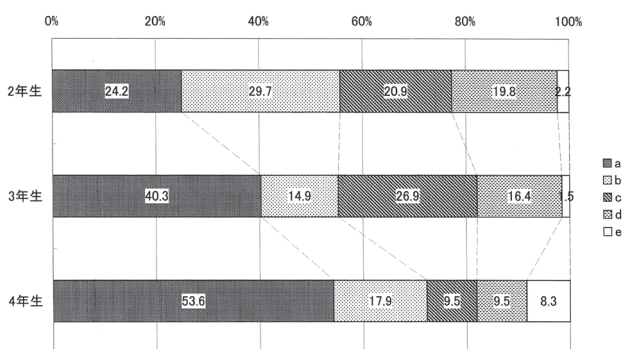


図1 教職希望度

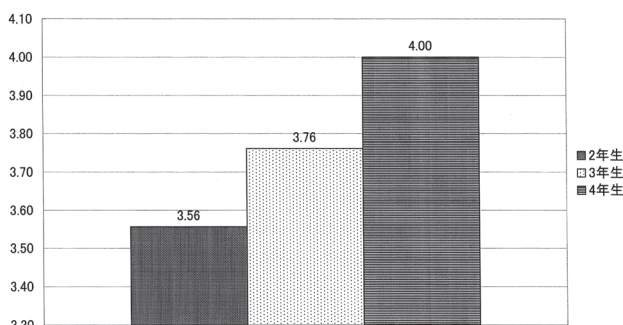


図2 教職希望度平均

図3は、何故教職に就きたいのか、その理由を上位5位までを選択した結果である。ここでは、a「子どもが好きだから」、b「子どもと関わっていたいから」が多く、平

均するとそれぞれ27.6%、22.6%となる。次いで、c「子どもの教育をしたいから」14.9%、d「教育を受けた教師の影響」の13.7%となっている。全体の約7割が、子どもと接することができることを理由としている。また、dが比較的高いのは、「尊敬する教師に出会ったことがあるか」という質問に対して、大半の学生が「出会った」と答えていること（註）も影響しているだろう。e「両親や兄弟の影響」との関連では、学生の約2割が両親や兄弟が教師であった。f「永く勤められるから」では、g「公務員だから」、h「お給料が安定しているから」とあわせ、職業決定の大きな要因となることがわかる。また、i「その他」では、「自分の可能性を試してみたい」「人間の成長を見ることができる」「人に（子どもに）影響を与える仕事だから」といった内容がみられた。

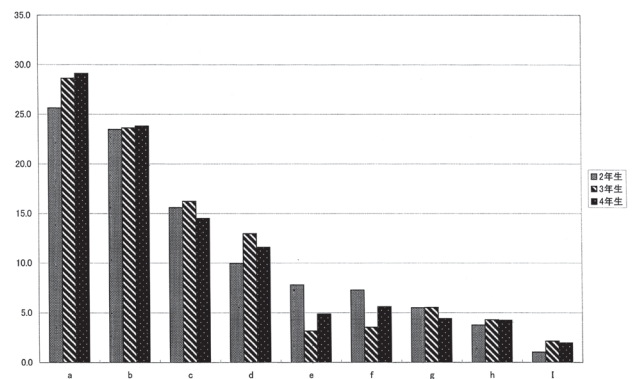


図3 教職に就きたい理由

(2) 学校社会の捉えかた

図4～図8は、学校社会というものを、学生はどのように捉えているのか、それぞれの項目の回答結果を示したものである。選択肢は、a「非常に良いと思う」、b「やや良いと思う」、c「どちらともいえない（わからない）」、d「やや悪いと思う」、e「非常に悪いと思う」

全体的には、大学生の2年生及び3年生では、全項目に対してしてb「やや良いと思う」が多少見られるものの半数以上の学生はc「わからない」と回答している。4年生になると微妙ながらも変化が見られ、a「とても良いと思う」、b「やや良いと思う」が多くなっているのは、注目すべき結果であると考えられる。これらは、後述の教育実習体験という関連性からも検討していく必要があるだろう。

具体的内容については、図4、図5は、現在の小学校教員は「自分の生活の満足度」及び「学校生活の満足度」をどのように感じていると思うかの割合を示したものである。大学2年生においては、どちらの項目も値は少ないがe「不満であると思う」が3.3%を示している。その理由は

小学校教育実習における現状と展望（Ⅲ）

「学校にいる時間が長く自分の時間がないと思う」「常に保護者や他人から見られていて大変そうだ」「自由が無さそうだから」といったなどの記述がみられた。3年生、4年生では、b「やや満足していると思う」が増加傾向にある。図6は、学校での教員間の人間関係を示したものである。ここでは、「わからない」との回答が2年生では、61.5%、3年生では、53.7%、と半数以上みられるが、4年生では、31.0%と少なくなり、「やや良いと思う」が50.0%を占めている。「やや悪いと思う」では、割合的には少ないが、2年生4.4%、3年生7.5%、4年生1.2%となる。図7は、保護者との関係を示したものである。図6の結果と同様に「わからない」が半数以上を占めているが、「やや悪いと思う」が、2年生19.8%、3年生25.4%、4年生10.7%となり、他の質問項目と比較して多いことに気づく。後述の「学校社会への不安の内容」においても、「保護者との接し方」が多くみられたこととあわせ考えると興味深い結果ともいえる。

図8は、クラスの子どもと教員の関係を示したものである。ここでは、2年次、3年次に「わからない」がそれぞれ42.9%、40.3%みられたものの、4年次のほとんどが「非常に良い」「やや良い」となっている。

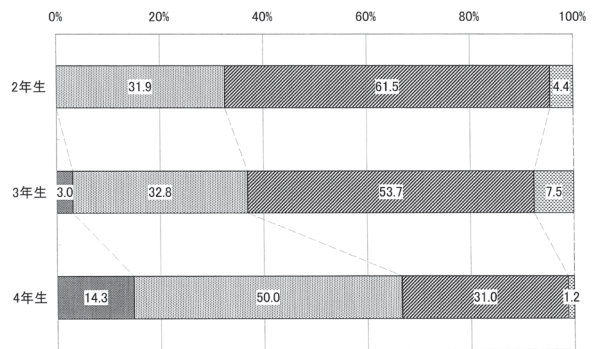


図6 人間関係

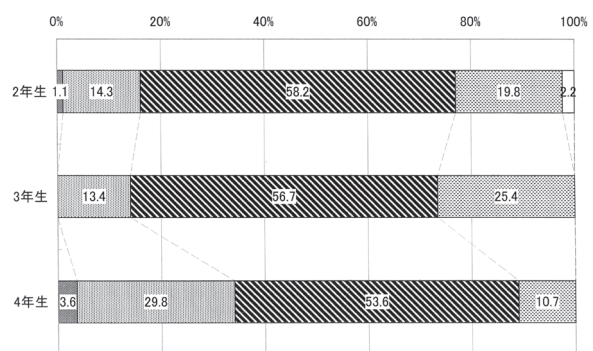


図7 保護者との関係

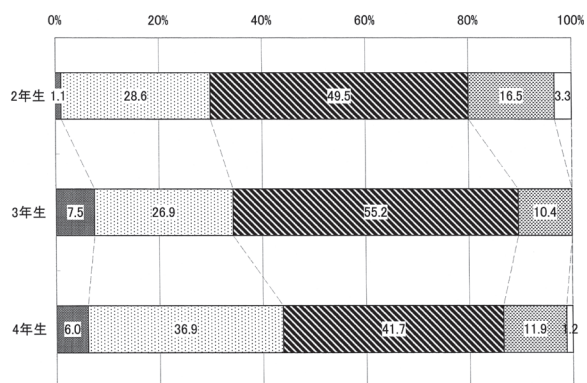


図4 自分の生活の満足度

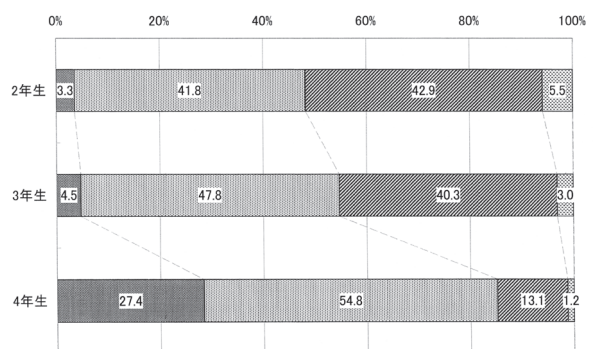


図8 子どもとの関係

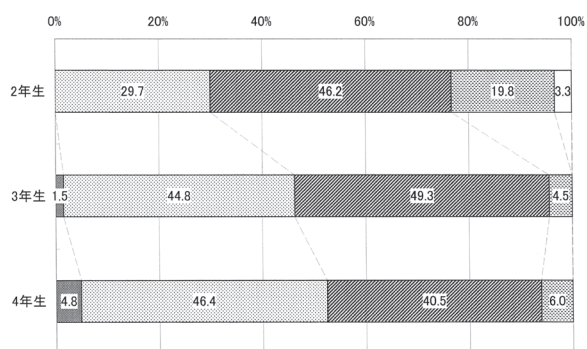


図5 学校生活

(3) 教職への適応度

ここでは、将来、教職に就くであろう学生にとっての学校社会に対する不安や適応度について検討する。

図9は、学生の教職への不安度の割合を学年別に示したものである。2年生では、a「非常にある」2.2%、b「ややある」45.1%、c「どちらともいえない」39.6%、d「あまり無い」9.9%となっている。3年生では、aが、22.4%、bが55.2%と不安度が大幅に増加している。4年生では、やや減少傾向にあり、aが21.4%、bが40.5%、代わってdが6.0%と若干増加していることがわかる。図10は、学

生の教職への不安の内容を学年別、項目ごとにその割合を示したものである。ここでは、最も多くみられた項目は、オ「保護者との接し方」であり、各学年共も70.0%近くを占めている。特に2年生のほとんどは、具体的内容に「モンスターペアレントの存在」を指摘し、「子どもの親に何を要求され、どのようなことを言われるのか不安」「どのように保護者と話したらいいのかわからない」といった記述が多かった。これらの不安は、就業してから家庭訪問、学級通信、懇談会の機会を通して保護者の期待や要求を把握しながら、良い関係が築かれると思われるが、現代の学校社会、教員社会および教員養成についての新たな問題点を見出すことができる。

次いで、多かったのが、ア「学級経営のあり方」イ「教科指導のあり方」である。3年生、4年生になると急激に増加しているが、これは、大学（教員養成）における授業内容に、専門教科や教職論などが多く取り入れられ、「実際に子どもを指導することが自分にできるだろうか」「学級崩壊をおこさないだろうか」「教科を教えらるるだろうか」という具体的不安が見られるのである。また、ウ「児童との接し方について」エ「教職員との接し方について」といった人間関係やコミュニケーションのあり方にも問題を残す結果であろう。特に注目されるのは、2年生において、ケ「言葉使いについて」が比較的多かったのが印象的である。

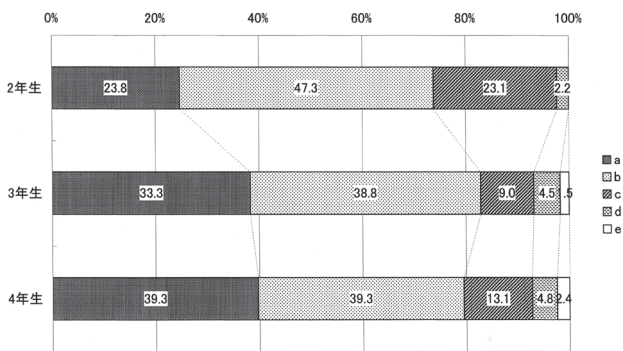


図9 教職への不安度

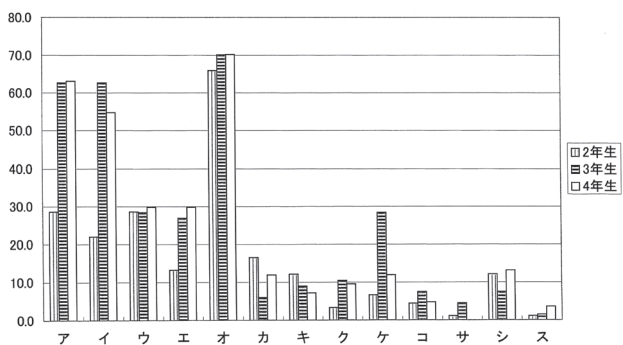


図10 不安の内容

上述のような不安を持ちながらも、実際の学校社会への適応性ではどうだろうか。図11は、「学校社会に自分は適応していけると思うか」という質問に対する回答結果である。2、3年生では、c「どちらともいえない」といった回答が半数以上、d「あまり適応できない」がそれぞれ、8.8%、6.0%みられた。4年生では、a「とても適応できる」が3.6%みられ、b、cは、45.2%となっている。平均値では、学年ごとに3.18、3.28、3.45と徐々に高くなり、自信を増しているということもいえるだろうが、大幅な上昇ではない。

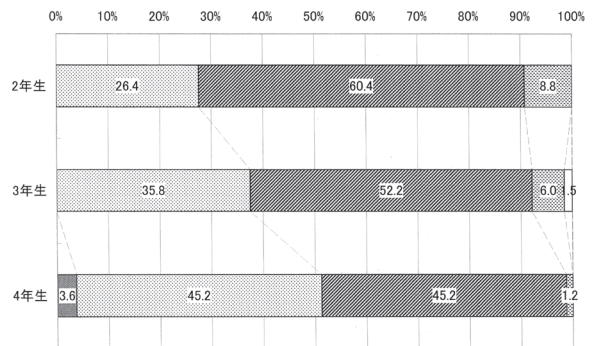


図11 教職への適応度

(4) 学校社会への適応について

図12は、「教師としてあるべきこと」に関する有無の割合、図13は、そのために「大学で習得すべき教師の資質」の内容を示したものである。ここでは、a「非常にある」、b「ややある」の割合が、3年生に多くみられ、教職に対しても、図9に見られるように最も不安度が高く、さらに、図13の各項目においても値が高いのが特徴的である。具体的な内容を見ていくと、d「教科の指導方法」と並び、c「礼儀作法」が高い割合を示していることに注目される。

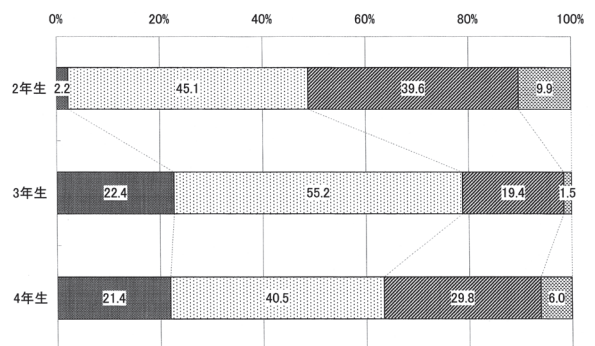


図12 教師としてあるべきこと

小学校教育実習における現状と展望（Ⅲ）

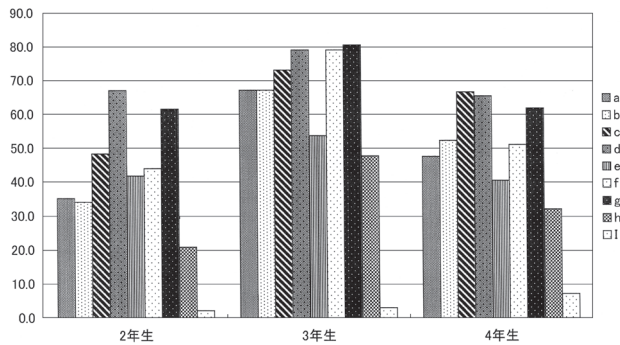


図13 習得すべき内容

図14は、学校社会へ適応していくというのはどのような事だと感じているかを、図15は学校社会へ適応していくとに必要な要素はどのようなことかを、項目ごとにその割合を示したものである。図14では、a「他の先生との連携」(16.4%)、b「地域・保護者との連携」(15.0%)、c「組織の一員になること」(12.3%)、d「協力しあうこと」(9.6%)、e「人との関わりを大切にすること」(6.8%)、f「礼儀・上下関係」(4.1%)の順になっている。これらの結果からは、学校社会に適応していくことは、「職場なのだから、一人で働いているのではなくみんなで働くということ」「学校社会は子ども、職員を含めたたくさんの人間がかかわりあって構成している社会だと思う。そのため自分だけでは仕事ができない。協力し合い全体のためを考えながら働くこと」等、周囲との人間関係が上手くいくことだということ強調した内容が多かった。

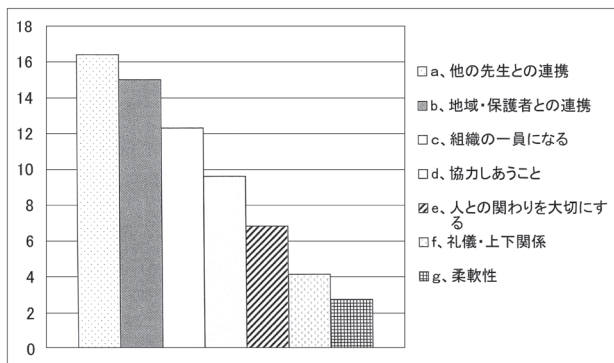


図14 学校社会の適応について

図15では、a「人柄」(23.3%)、b「コミュニケーション能力」(21.9%)が最も高く、c「明るさ」(16.4%)、d「協調性」(9.6%)、e「向上心」(8.2%)、f「積極性」(8.2%)、g「責任感」(6.8%)となっている。「人間性が豊かであること」が大事なことであり、「心豊かで大きいこと」「感情に左右されない」等の記述が多く見られた。bでは、「教師同士がコミュニケーションを取り合っていくことによ

て上手くいく」等、そして、cでは、「何よりも明るさが一番」を挙げている。その他、dでは「学校社会は多くの人で成り立っているので協調性が大切」、また「自ら周囲の人と関わっていくこと、向上心を忘れないで事が、教師として学校社会に適応していく上で必要だと思う」といったことがあげられる。

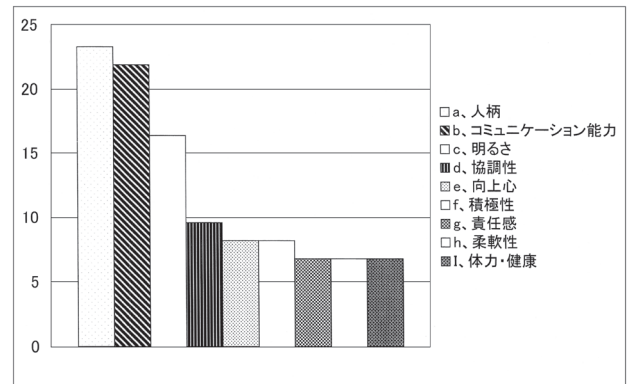


図15 学校社会の適応要素

まとめ

以上、学生の教職観に関する各項目について、主として学校社会への適応という観点から調査結果を述べてきた。要点をまとめてみると、まず教職志望度では、各学年とも高い値を示し、学年ごとにその値が上昇している。教職志望を方向付けた要因としては、幼い頃から「子ども」が好きであり、子どもとの関わりを持った職業に就きたい理由に次いで、「今までに教育を受けた先生の影響」が両者共比較的高くなってきていること、さらに、「両親や兄弟の影響」などとあわせみると、大学に入学する以前から形成された教職志向性がそのまま継続されていると考えられる。そして、教職志望の理由では、「子どもの成長に直接関わり、やりがいや生きがいを感じることができると思う」といった教員独自の意義を見出している。また、教員としての素養や使命感、役割といったことをすでに備えていること、学年ごとにその意識、関心が徐々に高まり、教育実習経験でさらに強調されるようになる。

次に、学校社会に対する調査では、小学校教員の生活や人間関係の満足度については、「どちらともいえない」「わからない」「教職に就いてみないとわからない」というような判断を保留する回答が多かった。しかし、大学4年次になると「やや良い」あるいは「やや悪い」といったような考えが増加している。これらは、教育実習体験との関連性が十分に考えられる。

学校社会への適応性については、指導技術や知識の必要性和同時に人間関係における礼儀や関わり方に心配があり、特に保護者との対応に大きな不安を持っていることが

わかる。小学校教員としての資質についてみると、特筆されるべきことは、「礼儀作法」「一般常識」を必要なことと感じていることである。小学校教員は子どもや保護者からはもちろん、社会からも期待とともにその人間性がみられている。公務員として、善良な人としての一般常識を兼ね備えていることが大事なことだと実感しているのである。例えば、先輩や目上の人への言葉遣い、態度、挨拶は人間関係を円滑にし、子どもへのモデルともなる。学校集団の中でのルールを守ることによって集団の一員として存在していくことができるということであり、日常の中で身に付けていくことが何より重要だと感じているのである。すなわち、学校社会へ適応していくためには、「集団の中での礼儀や挨拶」、「教員としての常識ある言動」の大切さが強調され、教員としての人間性に関わる要請のあり方が問われる結果であった。

また、学年ごとに微妙な変化が見られたが、その背景のひとつには、4年次の教育実習の体験が大きく影響していると思われる。教員養成課程では、教育実習は大学での理論研究を実証研究することにより学校現場の現実的な姿を学ぶことができるという重要な役割を占める。

教育実習指導においても、指導技術や方法、実践的なことはもとより、学校や教員としての自分自身を相対的に認識することのできる基礎を養うことや、コミュニケーション能力を養わなければならない時期になっていることを痛感する。

今後の課題

学校社会へ適応（社会化）していくということは、学校社会の中のあらゆる状況や場面において自分自身の行動を客観的に把握できる能力が必要だと思われる。そのために支援サポートのあり方が早急な課題となるであろう。今後は、2,3年次の教職志望性が、大学生活を通じてどのように持続あるいは変化するのかということを検証し、さらに新任教員が学校社会へ適応していく変容過程を捉えていくことにより、そこでの問題の所在を明確にしていくことが必要であると思われる。

註

- 福田啓子、真田洋子「小学校教育実習における現状と課題」2007年3月 東京家政大学研究紀要第47集
福田啓子、中村浩子「小学校教育実習における現と展望（Ⅱ）」2008年3月 東京家政大学研究紀要第48集

参考文献

- 1 久富善之「教員文化の日本的特性」多賀出版 2003年
- 2 永井聖二「教師という仕事=ワーク」学文社 2007年
- 3 藤枝静正「教育実習学の基礎理論研究」風間書房 2003年

Summary

The current changes in society are having a major impact on the school environment, resulting in diverse and complicated problems for elementary school educators. In order for educators to be good leaders of children, they need to understand and become a part of the school society. This includes adapting to the school system, being successful in interpersonal relationships, knowing the role of educators, learning and demonstrating appropriate discipline, attitudes, values, techniques, etc. This research paper was prepared for teacher training institutions to determine what to teach and how to train future educators. Based on students* surveys, we have identified some of the major problems and needs of educators at elementary schools today.

The results of the study are as follows:

1. Students preparing to become educators usually determine to become teachers many years before entering college.
2. **The strong influences of their own teachers as well as their parents were the top reasons many students chose to become educators.**
3. Students* determination to become educators grows each year that they continue to study at college, learning to adapt to the school society and the culture of schools.
4. Even more than technique and knowledge, students are concerned about interpersonal relationships with staff and parents as well as school manners and etiquette.
5. Many students stated that their experience of student teaching was a big turning point as they made decisions about their future career.

Educator training must include more than technique and method. It must also include emotional support, training about etiquette, and giving students the technique to communicate well.

In conclusion, at educator training institutions, good cooperation and communication between and with staff members is necessary. Also, students must take a more active approach in learning the necessary skills to fulfill their roles as elementary school educators. As we teachers of educators move forward, we must consider more concrete training, student support, and practical curriculum as we train tomorrow's educators.